インタビューコーナー

本島の陸続きの僻地、北部地区医療圏への多大なる御支援の程、宜しくお願い致します。

沖縄県立北部病院 病院長
上原　哲夫　先生

Q1. この度は、沖縄県立北部病院院長へご就任おめでとうございます。院長に就任されて、今の率直な感想と今後の抱負をお聞かせください。

4月に院長に就任して数ヶ月がたちましたが、前任地の宮古病院副院長職とは違い、組織の長としての重責を日々感じているところです。まずは現状の把握として、隣接する病院の訪問を開始して、先日愛楽園の訪問でほぼ終えたところです。陸続きでありますが、僻地医療としての役割が大きいと感じております。地区医師会からの歓迎会も済ませ、地区医師会病院との医療の機能分担等も協力しながら、地域医療の発展に尽くしたいと思います。

Q2. 北部地域は離島を含めた広範囲であるため、救急医療体制の安定化には大変ご苦労をされていると思います。また、医師確保（内科、産婦人科、小児科）、生活習慣病対策等多くの問題があると思いますが、現状と今後の課題についてお聞かせください。

救急医療は本院の北部地区医療圏の役割の中で大きな比重を占めるものであります。特に救急室経由の重症患者さんの入院は当院の生命線と考えております。現在内科の指導医クラスの欠員があり、金曜、土曜の内科の当直を中部病院や南部医療センターからの応援でカバーしています。そのため内科医の労働負担の軽減のため、夜間10時から翌朝の8時まで、歩いて来れる（Walk In）軽症の内科の患者さんは、医師会病院のご協力により引き受けてもらっています。研修医の指導を含めた入院患者さんの治療には指導医の増員が不可欠でありますので、8月に見学で来院される内科医にも期待しています。

産婦人科医は、3月まで1人でしたが、4月に2人体制、7月より3人体制になりましたが、業務内容の検討等を行いながら、徐々に拡大できればと思っています。2箇所の近隣の開業の先生方との連携を密にしながら、ハイリスクの患者さんを受けるには4人体制まで持っていければと考えていますが、次年度の琉球大学や中部病院からの応援を大いに期待しているところです。産婦人科の発展に伴って新生児等の小児科医の増員もこれからの問題です。現在の5人体制での当直等の時間外勤務は年間700時間を越えますので、6人体制が望ましいところです。また北部地区の3人の小児科医のご支援を受け、準夜帯の救急室の診療にも参加していただいていることにも感謝しています。

生活習慣病対策等は、前述のように内科医不足のところもあり困難な問題でもありますが、

名護市との連携のもと特定検診についての対策等の協議が始まったところです。

Q3. 平成21年度から始まった地域医療再生計画で北部病院は電子カルテの導入と、県医師会あげての糖尿病・連携パス、脳卒中連携パスの運用開始が始まりますが北部病院の取り組みについてお聞かせください。

地域医療再生計画の事業の中で、当院も電子カルテの導入を推し進めていますが、今年度3月までには導入できればと思っています。その中で糖尿病や脳卒中の地域連携パスの運用を予定していますが、電子カルテの機種選定や導入のノウハウ等これから忙しくなることが予想されます。

Q4. この度の東日本大震災では、貴院も災害支援を行ったと伺っております。北部医療圏域での災害対策と貴院の役割について、上原先生のお考えをお聞かせ下さい。

このたびの東日本大震災で被災された皆様に謹んでお見舞い申し上げますとともに、1日も早い復興を祈念いたします。当院のDMATの一員も支援に参加いたしましたが、北部地区での災害対策の基幹病院としての役割について考えて見ますと、あのような想定外の災害が起こった場合にどのように対応できるのか今一度、県や市町村とともに見直す必要を感じております。今までの防災訓練等は多くても100人以内での医療機能の検討のような感じがいたします。また職員の多くが中南部からの遠距離通勤ですので、時間帯によっては機能の半減、役割の分担確認等課題が多いと思われます。

Q5. 県医師会に対するご要望がございましたらお聞かせください。

県医師会の2次の地域医療再生事業、確保困難な地域への産婦人科医の派遣事業には大きく期待しているところです。陸続きではありますが離島のように医者の確保が困難な地域であり、多くの皆様方のご支援をお願いいたします。

Q6. 最後に日頃の健康法、ご趣味、座右の銘等がございましたらお聞かせ下さい。

体を動かすことで健康を保ちたいなあと思っていますが、通勤等の時間が多くなり毎日の運動はマンションの階段を上り下りするくらいでしょうか。学生時代は準硬式野球、現在はゴルフを楽しんでいますが、暑くて遠のいています。時々三味線を弾いたりもしています。国費留学生を目指していたころは、“忍耐、努力”をかざして頑張っていましたが、還暦を迎えるような年になってくると生きていることの楽しみを孫たちと分かち合っています。現場では週1の乳腺外来と、手術場に入れる喜びを大事にし、若い外科医の成長に少しでも役立ちたいと朝の回診を楽しんでいます。

この度は、インタビューへご回答頂き、誠に有難うございました。

インタービューアー：広報委員　石川 清和